令和２年度 第６回FD研修会

総評　リベラルアーツ機構長　　小番　達

令和２年度第６回FD研修会は、全学FD委員会とリベラルアーツ機構との共催というかたちで令和３年２月８日（水）（学生会館サクラウム３階大講義室B及びMicrosoft Teamsを用いたオンライン）に開催された。

本学は、建学の精神でる「平和・自由・進歩」に基づいた幅広い教養をもつ人材の育成を教育目標の一つとして掲げている。こうした人材を育成してゆくためには、教職員自身もまた幅広い教養を身につけておくことが必要不可欠と考える。そのため、リベラルアーツ教育の実践・推進の母胎となるリベラルアーツ機構では、隔年で教職員を対象に自身の教養の拡大・深化を目的とした研修会を企画・開催している。

今回は、元琉球大学教授で作家・詩人の大城貞俊氏をお招きし、「沖縄で創作することの意味―極私的体験論から普遍的文学論へ―」という演題で講演をしていただいた。

講演の内容を大城氏が作成したレジュメの項目に従って簡単に紹介すると以下のようになる。はじめに、Ⅰ沖縄文学の特質、Ⅱ極私的な体験論１（団塊の世代の沖縄発見）、Ⅲ極私的な体験論２（文学への開眼）、Ⅳ普遍的な文学論へ（創作者としての出発）、おわりに、である。やんばるの地で生まれ育った大城氏自身の人生、また氏のご家族や地域の人びとの人生、そして沖縄が背負ってきた／背負わされた歴史と関連させながら氏にとっての文学、沖縄にとっての文学について、平易に、時にはユーモアを交えながらお話しいただいた。また、『椎の川』や『奪われた物語』といった自身の著作だけでなく、大城立裕、又吉栄喜、目取真俊、与那覇幹夫、八重洋一郎といった沖縄を代表する作家が描いた作品世界の一端も紹介いただいた。この講演の中で、沖縄で文学することの意味とは、他者の悲しみを共有し、声なき声を浮かび上がらせ、沈黙したくなる言葉を探して作品化すること、また、必死に生きる尊い命を描き、作品化すること、さらに日常の言葉を詩に転化し、沖縄の過去、今、そして未来を問い続けること、という言葉が印象的だった。これらは直接的あるいは間接的に本学の建学の精神にも結びつくはずである。沖縄、やんばるに立地する本学の教職員にあっては、沖縄の文学を通して、沖縄が辿ってきた過去を振り返り、現在のありようを確認し、その上で未来を描いていくという作業が求められているようにも思う。その意味でも非常に貴重で、有意義な講演であった。改めて大城氏に感謝申し上げたい。

本研修会は78名の参加があり、うち28名からアンケートの回答があった。その結果、「満足」39.3%、「やや満足」46.4%と85%以上の回答者から好評価を得た。また、アンケートのコメントからは「このようなやんばるや北部を教材とした文学的な研修にて視野が広がりました。」「後学期が終了した時期に、文学や音楽、その他芸術に関するFD研修

を行うのは、リベラルアーツの考え方を重視する本学のポリシーに合っていると思います。継続してほしいです。」「今回の講演を期に、沖縄文化の特性についてもっと知りたいと思った。特に沖縄の人々の生活と県民性との関連などもぜひ知りたいと思った。」といった内容が寄せられた。今回の研修会の目的を踏襲するかたちで、今後、新たな企画を検討していきたいと思う。

今回は対面とオンラインのハイブリッド形式で研修会を実施したが、オンラインでの映像、とくに音声が断続的に途切れる、聴き取り難いといった不具合が生じた。この点、関係部署とも連携し、機器の設定の仕方などを改善してゆきたい。（了）